

《十夜》之第三夜 PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/146/2021_2022__E3_80_8A_E5_A4_A2_E5_8D_81_E5_c105_146233.htm こんなをた。六つになる子供を(おぶ)ってる。たしかに自分の子である。ただ不思な事にはいつのにか眼が(つぶ)れて、青坊主(あおぼうず)になっている。自分が御前の眼はいつれたのかいとかと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相ないが、言つきはまるで大人(おとな)である。しかも等(たいとう)だ。左右は青田(あおた)である。路(みち)はい。(さぎ)の影が々(やみ)に差す。「田圃(たんぼ)へかかったね」と背中で云った。「どうして解る」とを後(うし)ろへ振り向けるようにしていたら、「だって(さぎ)がくじゃないか」と答えた。するとがはたして二声ほどいた。自分は我子ながら少し怖(こわ)くなった。こんなものを背(しょ)っていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣(うち)やる所はなかろうかと向うをるとの中に大きな森がえた。あすこならばと考え出す途端(とたん)に、背中で、「ふふん」と云う声がした。「何を笑うんだ」子供は返事をしなかった。ただ「御父(おとつ)さん、重いかい」といた。「重かあない」と答えると「今に重くなるよ」と云った。自分はって森を目(めじるし)にあるいて行った。田の中の路が不にうねってなかなか思うように出られない。しばらくすると二股(ふたまた)になった。自分は股(また)の根に立って、ちょっと休んだ。「石が立ってるはずだがな」と小僧が云った。なるほど八寸角の石が腰ほどの高さに立っている。表には左り日(

ひ)ケ(くぼ)、右堀田原(ほったはら)とある。(やみ)だのに赤い字が明(あきら)かにえた。赤い字は井守(いもり)の腹のような色であった。「左が好いだろう」と小僧が命令した。左をるとさっきの森がの影を、高い空から自分らのの上へ抛(な)げかけていた。自分はちょっと躊躇(ちゅうちょ)した。「しないでいい」と小僧がまた云った。自分は仕方なしに森の方へき出した。腹の中では、よく盲目(めくら)のくせに何でも知ってるなと考えながら一筋道を森へ近づいてくると、背中で、「どうも盲目は不自由でいけないね」と云った。「だから(おぶ)ってやるからいいじゃないか」「ぶって(もら)ってすまないが、どうも人に鹿にされていけない。にまで鹿にされるからいけない」何だか(いや)になった。早く森へ行行ってててしまおうと思って急いだ。「もう少し行くと解る。——ちょうどこんなだったな」と背中で独言(ひとりごと)のように云っている。「何が」と(きわ)どい声を出していた。「何がって、知ってるじゃないか」と子供は嘲(あざ)けるように答えた。すると何だか知ってるようながし出した。けれども判然(はっきり)とは分らない。ただこんなであったように思える。そうしてもう少し行けば分るように思える。分ってはただから、分らないうちに早くててしまって、安心しなくってはならないように思える。自分はますます足を早めた。雨はさっきから降っている。路はだんだん暗くなる。ほとんど中である。ただ背中に小さい小僧がくっついていて、その小僧が自分の去、在、未来をことごとく照して、寸分の事も(も)らさないのように光っている。しかもそれが自分の子である。そう

して盲目である。自分はたまらなくなった。「ここだ、ここだ。ちょうどその杉の根のだ」雨の中で小僧の声は判然えた。自分はえず留った。いつしか森の中へ入(はい)っていた。一(いっけん)ばかり先にあるいものはたしかに小僧の云う通り杉の木とえた。「御父(おとつ)さん、その杉の根のだったね」「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。「文化五年辰年(たつどし)だろう」なるほど文化五年辰年らしく思われた。「御前がおれをしたのは今からちょうど百年前だね」自分はこの言をくや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんなのに、この杉の根で、一人の盲目をしたと云う自が、忽然(こつぜん)としての中に起った。おれは人(ひとごろし)であったんだなと始めてがついた途端(とたん)に、背中の子が急に石地のように重くなった。

100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问
www.100test.com